

生 活 文 化 論 考 I

原 田 佳 子

A Study of Culture and Life I

Yoshiko HARADA

Abstract

It is six years since Hiroshima Jogakuin College started offering the special course, Culture and Life. I want to analyze what this course "Culture and Life" wants to teach in this paper. At first, I will make an analysis of "what is life" and "What is culture" respectively. Then I will make my own definition of "Culture", explaining several definitions by famous scholars. Next, I will discuss culture in life. Finally, I will talk about why we must study Culture and life and how many ways there are so as to study Culture and life.

I 緒 言

本学に生活文化専攻が創設されて6年余。毎年100名近い優秀な学生が集まっている。その生活文化専攻の学生を相手に、種々の講義を行っている者にとって、一体生活文化とは何か、何をどのように教授するのが、その目的にもっとも適うのか、改めて問うてみるのは、決して無駄なことではないと思う。と言うより、その根本のところを捉えずに、生活文化専攻の学生を対象とした意義ある授業はできないように思う。

一度根本的に生活文化について研究考察し、自分なりの持論を打ち立てておきたいというのが、この小論執筆の動機である。

確かに「生活」と言い、「文化」と言い、現代の我々にとって余りに身近く、改めて問うまでもない程である。ことに「文化」という言葉は、戦後の高度成長政策による経済復興の後、文化国家、文化都市、文化住宅、文化教室などあらゆるところに使われ、辟易するほどである。それは「文化」という言葉の意味が多様で便利なので、安易に使われているからであろう。一説に164通りの意味を持つ（アメリカの学者クレバーとクラックホーンの説）といわれ、百面相をした「文化」は、あらゆる場面に登場している。今日観客にとっては「またか」の感が強い出ずっぱりの言葉なのである。

しかし、それでもなお我々は日々「生活」し、現代社会の「文化」に浴している。そして「い

まなぜ『文化』の時代か」が問われ、今なお「文化」は実に多くの世の関心を集めている。「もの」から「文化」へ、働きバチから人間的な余裕のある「生活」へ、さらに少しでよりよい「文化」や「生活」が志向されている中で、現地点での我々の「生活文化」について探究することは、本論で述べるように実は何よりも大切なことである。今日文化の時代といわれるのも、現在がかつてないほど文化的な時代であるからというよりも、文明が進み経済的にある程度発展を遂げた中で、ふと「文化」を置き忘れていたことに気付いて、文化、文化と呼び求めていると思われる。あるいは、過去の各々の時代にあった文化とは異なる現代の「文化」を求めているのかもしれない。

ともあれ「生活」について、「文化」について非常に多くの人々が語っている。ことに「文化とは何か」(T・S・エリオット著)、「文化の意味」(F・アラン・ハンソン著)など、文字どおり「文化」が書名につく文献は夥しい。それはそれだけ「文化」について関心が持たれているということであろう。

しかしこの二つの言葉を合わせた「生活文化」についての著書は見あたらない。従って本稿は、「生活」と「文化」へ各々アプローチした後、「生活文化」についてその意味、方法などを考察することを目的とする。その課程の中で、我々は何を学び何をどのように教授すべきかが見えてくるものと思う。

II 生活へのアプローチ

生活とは、文字どおり「生きて活動すること」である。人の誕生から死の直前まで、生ある限り繰り返される日々の営みである。朝起きて着、食べ、学び、遊び、働き、憩い、寝る暮らしのすべてが生活である。就学年令の者には学校生活があり、就労年令の者には職場での生活があるように、学業や仕事もまた大きく言えば生活の中に組み込まれている。

また政治や経済、芸術や科学でさえ、人間の生活の中から起る人間的行為であり、逆にそれらすべてが、人間の生活のためにあると言っても過言ではなかろう。どんなに高尚な学問思想であっても、人間の生活の中から起らないものは一つもないのである。先進科学の粋を集めたスペース・シャトルも、操作する人間の日々の営みを立ち切ることはできない。人間は自分が生きものであり生活するものであることを忘れた時、自他の生活を破壊する戦争を起こすのではなかろうか。戦争は利己的な生活欲求から始まり、核軍備は地上の人類だけでなく生きとし生けるものの生活権を脅かすものである。

それはともかく、生活することは人間の基本である。人生の喜びも悲しみも生活の中にあり、青い鳥は日々の生活の中にこそ求められるべきものである。太古より人類にはさまざまな生活があった。そして現在世界各地に各人各種の生活があるが、常に人間にとって生活することが

重大な意味を持っていることに変わりはない。生活は衣・食・住をはじめ広汎な意味内容を含み、人間に関わること、人間が生きて活動することすべて生活ならざるはなし、と言っても過言ではなからう。ゴーリキーの「どん底」のサーチンのセリフに、「すべてが人間のなかにあるし、すべては人間のためなんだ！……にん、げん！これは一りっぱだ！これはひびくぜーほこらしく！」というのがあるが、その人間にとって切り離せない生活は、これまたほこらしく響く大切なものである。その生活を量的にだけでなく、質的に豊かにすることに、誰も異存はないと思う。

Ⅲ 文化へのアプローチ

先に述べたように、文化について書かれた書物は非常に多く、いかに我々人間の文化に対する関心が強いかがわかる。先に挙げた文献の他にも、文化人類学者の立場から考察したルース・ベネディクトの「文化の諸様式」、評論家吉田光邦氏の「文化の手法」、加藤秀俊氏の「文化の社会学」などいろいろな角度から文化が論じられている。社会主義者で革命の父といわれるレーニンや深層心理学のフロイトなども文化論を試みている。これらのいろいろな文化論に触れるなら、ちょうど各時代各地域にさまざまな「生活」があったように、各時代各地域にさまざまな「文化」が在存するということがわかる。しかしここでは個々の多様な文化内容を問題にするのではない。文化の定義については後で述べるとして、ここでは文化という言葉の意味、今日一般に使われている文化とは何か、改めてアプローチしておきたいと思う。

文化という言葉がわが国で使われ始めたのは、明治に入ってからである。ドイツ語の *Kultur*、英語の *Culture* の訳語として使われ、日本語になってまだ100余年という、比較的新しい言葉である。にもかかわらず、その意味内容が広く時代の欲求に合っているせいか、便利な時宜的言葉として現代におけるもっともポピュラーな言葉の一つになっている。*Kultur* や *Culture* が「耕す」という意味のラテン語 *Cultura* から来ていることはよく知られている。西欧では18世紀以降、*Culture* は個人または社会の知的精神的教養や、芸術・学術の成果という意味で使われ、さらに一定社会の生活様式など広い意味内容を持つに至った。

普通一般的に文化はその語源からして、自然のままの生物的本能以外のもの、耕し培養されはじめ得られるものと言われよう。中国では、武力によって化する「武化」に対し、文の力によって化するのを「文化」と言ったという。即ち人間が自然に対し思想や技術意匠などを加えることによって、自然に新たな価値や意味をもたらすことが文化と言えようか。確かに耕し培養するという語源からすれば、*Culture* を人間の知性、教養と解するのは妥当と思われる。また人間精神の創造的産物である芸術や学術というのも領ける。

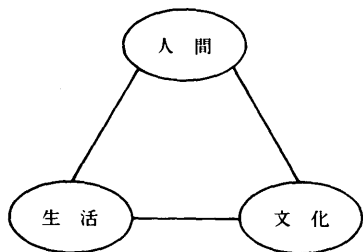
しかしこの1世紀の間に文化の意味はさらに拡大された。19世紀後半に人間について総合的

に研究する学問人類学が起ったが、中でも文化を枢軸として人類を考える文化人類学の立場から、Culture は一定社会の生活様式という意味が強調されるようになった。つまり文化人類学は、地球上に現存する諸民族をその文化や社会によって比較研究する学問であり、諸民族の文化を研究することは、その生活様式を研究することに他ならないからである。文化人類学者は、「人間の文化とは、きわめて日常的なレベルでとらえたわれわれの生活の仕方、あり方である」(「日本の社会文化史」平野健一郎著)と考える。

これは誠にわかり易い文化の捉え方といえよう。かくて知性教養という捉え難いもの、人間精神の創造的産物という高次元の意味だけでなく、一定社会の生活様式という意味に拡大されて、文化はずっと我々に身近かなものとなった。そして今日ではむしろこの新しい広い文化の意味の方が一般的になりつつある。

即ち人間が単に自然のまま本能的に食べて寝るだけでなく、人間らしく身に美しく衣をまとい、調理しておいしく食べ、快い住いを作って眠るという人間らしい生活の仕方そのものが文化なのであると解されよう。

文化人類学者は、生活様式の共通性は即ち文化の共通性とみなす。生活様式が個人から社会へ広められ、社会によって受け継がれるように、文化もまた社会によって受け継がれ広められ



る。個人はある特定の文化の中に生まれ、その文化を担うと同時に、その文化によって思考や行為が規定される。文化は生活と同様に人間が人間として生きる限り、人間から切り離せないものであり、生活と文化もまた互いに切り離せないものである。人間と生活と文化は、図のような三位一体の関係にあると言えよう。

いかなる人も生活から脱することはできないし、生まれ育った文化から逃れることはできない。文化は人間社会にのみ存在し、人間だけが持つものである。

IV 文化の定義

Culture がより広い意味を持つようになった19世紀以来、Culture の定義がいろいろ試みられている。ここでは既に古典的定義と言われる1871年のE・タイラーの定義から、現在なお試みられているさまざまな文化の定義を見ることによって、最も新しい文化の定義を試み、その概念を捉えて見たいと思う。

なお、その前に文化と文明の関係について触れておく必要がある。これに関しても諸説があるが、大きく分けると文明と文化を俊別する説と、文明と文化を互に関連において捉えよう

とする説がある。前者はドイツの歴史哲学者ディルタイによって代表される説である。即ち、文化は宗教や芸術、科学などのように、精神的に高度な価値を有するものとし、文明は具体的技術など物質的な下位のものとする。一方、英米の学者は文明は人間の精神的側面を支える物質的基礎であるとする。文化は文明の知的側面（オックスフォード英語辞典）というのである。

もともと文明 (civilisation) には、市民 (civil) による秩序だった世界という意味がある。秩序ある世界は、物質的なものだけでなく精神的なものとの関与が必要であろう。今日精神文化、物質文明と言われることが多いが、精神的側面と物質的側面はちょうど人間の心と身体のように深く関わり合ったものである。従って今日では文化と文明は対立するものではなく、相関関係にあると見るのが一般的な見方であると思う。今日のハイテク (high technology)¹⁾ は文明に属し、ハイタッチ (high touch)²⁾ は文化に属する。そして前者の技術文明は広がり、後者の精神文化はある社会、民族、地域の中に新たな創造性をもたらす、という渡辺昇一郎氏（上智大学教授、「いまなぜ文化の時代か」）の言は、誠に興味深い。

つまり文明は発展し広がるのに対し、文化は興隆し深まると言えようか。

さて本題の文化の定義であるが、人類学の父といわれる19世紀英国の学者E・B・タイラーは、その著書「原始文化」の中で、次のように文化を定義している。

「文化とは、知識、信仰、芸術、道德、法律、慣習、その他およそ人間が社会の成員として獲得した能力や習性の複合的全体である」

また米国の人類学者C・クラックホーンは、「文化とは、後天的歴史的に形成された外面的生活様式の体系であり、集団の全員または特定のメンバーにより共有されるものである」と定義づける。この二つは広く支持されている定義であるが、その他にも英国の詩人・評論家で「教養と無秩序」の著者マシュー・アーノルドは、文化を「世界でこれまでに言われたり、考えられたりしたものの最善のもの」と呼び、米国の文化人類学者で「菊と刀」の著者ルース・ベネディクトは、「文化の諸様式」の中で、「文化は即ち『慣習』の学であり、『人間』の学である」という。

またわが国においても、「文化とは、ある社会の中でみずからの手によって創られ、個体に分有され、社会によって伝承される生活様式」（今西錦司著「世界の歴史—人類の誕生」）や、「文化は自然の束縛から人間を解放する生活の知恵の集積」（平野健一郎著「日本の社会文化

1) ハイテク (high technology) ——ここでは高度先端技術そのものという意。一般的には日常のデザインに先鋭的な工業製品を持ちこむスタイル。工業技術を極度まで駆使したデザインを指す。

2) ハイタッチ (high touch) ——touchには人と人との付き合い上での精神的知的反応、手応えという意味があり、人間的な触れ合いや文化との接触をいう。

史」)などの定義を見ることができる。

さてここで、文化の概念についてまとめ、これら内外の著名な学者の文化の定義から、新たに定義を試みてみよう。

まず繰り返えし Culture の原点に溯れば、Culture が「土を耕す」から「心を耕す」となり、ローマ時代の哲学者キケロによって「魂の耕作」という意味に使われたことを忘れてはならないであろう。この語源からしても、Culture が人間の心や魂、精神面に深く関わっていることに変わりはない。そして個人が自己の魂や精神を耕して得た知性や教養が集まって、一つの集団、一つの社会の文化となり、個人や社会の創造的産物である芸術や学術が、その時代や社会の文化を形成するのである。さらに19世紀後半文化人類学の出現によって、Culture は一般社会の生活様式という広汎な意味を持つようになった。これは人間が物心両面から支えられて生活するものであり、その人間の文化というものは、精神的なものだけでなく、物質的なものも含むことを明らかにしたといえる。今日では文化は、宗教、政治、科学、芸術など人間の生活に関わるあらゆるものを内包し、人間の生き方の総べて、誕生から墓場までの生活の総べてに関与するものと言ってよいであろう。

そこで私は、文化は「人知の集積、人間の社会生活の基盤」と定義したい。

ところで、地球上の諸民族の文化や社会を比較研究する文化人類学の台頭は、この地球上で未知のものが次々と解明されて、異人種、異文化、異社会を内包しつつ、地球全体が一つの社会として連関してゆかなければならない現代と未来の人類の行く末を暗示するものではなからうか。個人により地域により時代により異なる文化、異なる生活様式を知り、理解する中で人類共通のものが見い出せる。この人類共通のものを見出し、互に理解すること以外、核戦争による人類滅亡の危機を乗り越える道はないであろう。

こういう意味からして、社会生活を営む人間特有の文化は、現代におけるもっとも大きな関心事であり、重要な課題であるといえよう。

V 文化の様相

これまで文化をその意味内容から考察して来たが、ここでは文化の諸様相を検討し、より広い視点から文化を捉えてみたい。それは我々が文化について語る時、大きく分けて考える文化の種類とも言えるものである。

1 物質文化と精神文化

先に文明と文化の関係を考察した時、かつては物質的技術的なものは文明に属し、精神的なものは文化に属すると考えられたことについて述べた。しかし今日、文化は精神的なものに留

まらず、物質的なものを含んだよりトータルな捉え方をされている。従って両方を含んだ文化、社会の生活様式の中で、比較的造形によることの多い文化を物質文化と言えよであろう。つまり生活の中で暮らしに役立つ物質文化であり、視覚が捉える「もの文化」である。一方の精神文化は、より知的な所産を言い、思考が捉える文化であると言えよう。

2 西洋文化と東洋文化

どちらかと言えば、西洋の文化は物質文化で、東洋の文化は精神文化と言われる。これは西洋と東洋を比較する時、西洋の方が高度に物質文明を発展させたのに対し、東洋は物質文明よりもむしろ精神文化の深化があるとされるからであろう。西洋は科学の発達と機械文明の進展からくる豊かな物質文化の世界を達成し、東洋あるいは東方民族は世界的な宗教や文明を生み、より多く人間の精神文化に根本的影響を与えている。勿論東洋にも物質文化はある。しかし単にものの技術的量的進歩発展よりも、例えば誰からも顧みられなかった素朴なめし碗を、茶の湯の道具にとりたてて使うといった精神的「もの文化」なのである。西洋と東洋の違いは単に地理的相違、生活様式の相違だけでない。より発達したものと文化と、より深化した精神文化の違いを見ることができようか。

3 異質文化と共通文化

文化人類学では、異なる社会の生活様式の異質性は文化の異質性であり、社会の生活様式が共通すれば、文化は共通するという。つまり地域が異なり、歴史と自然条件を異にする人々の生活様式が異なる時、その文化は異質文化であるという。同一地域の歴史と自然条件を同じくする人々の生活様式は共通し、共通文化を保持する。また一つの社会で培われる知的教養は、同じ土壌から成る共通性を持つが、異なる社会で培われる知的教養は、土壌が異なる故に異質であるといえる。

そして、文化は常に動的創造的なものである。個人あるいは一つの社会の知的集積はさまざまであるから、我々の周囲には共通文化よりも異質文化の方が圧倒的に多いと言える。自分が異質文化に囲まれていることを認識し、それらに柔軟に対処するならば、異質文化との接触で起るカルチャー・ショックもはるかに少ないであろう。しかしまた、異質文化との接触によって文化が深化するのも事実である。

4 普遍文化と個別文化

異なる時代、異なる社会に無数の異なる生活様式があり、また無数の個別文化がある。文化の意味を知的精神的教養まで遡れば、より小さい単位の個別文化に行き当たる。一つの社会は

一つの個別文化を成すが、一つの社会の文化は多数の集団の個別文化から成り、一つの集団の文化は多数の個人の個別文化から成る。

一方、各々個別文化を持つ個人、集団、社会を、人間という共通項で括ると、人類の文化という最大公約数が出てくる。例えば言語や抽象的思考などのように、時代と地域を問わず人間に共通する人類の文化を、普遍文化と呼ぶのである。

5 一過性の文化と継続性の文化

文化は時代とともに変化する。異質文化と接触し、絶えず変容する。その中で消える文化と残る文化がある。消える文化とは、個人の文化となり得ても、集団の文化となり得ないもの、集団の文化となり得ても、社会の文化となり得ないものであろう。また社会の文化となり得ても、時代の推移とともに忘れられる文化であり、これを一過性の文化という。

一方時代が移っても、社会により集団により個人により継続され、伝承される文化がある。この継続性の文化こそ、深く人間性に根差した人知の粹であり、人間技のまことに妙なるものといえよう。

6 空間文化と時間文化

また文化には、空間文化即ち地域の文化と、時間文化即ち時代の文化がある。その地域の自然条件によって、その地域特有の文化、独自の生活様式が生まれる。自然気候の違いは人間の思考まで変えると言われている。熱帯地方と寒冷地方の生活様式が、強いては文化が自ら異なるのは当然のことである。地域によって異なる独特の空間文化は、実に多様である。

一方、時代によって異なるその時代特有の文化がある。ギリシア・ローマの時代、中世やルネッサンスの時代、さらに産業革命後、世界大戦後、あるいは世紀末といったその時代だからこそ生まれる文化がある。一瞬として同じ時が巡ってこないように、各時代独特の時間文化もまた、実に多様である。

Ⅶ 生活文化の意味

さて、これまで「生活」と「文化」について各々考察を進めて来たが、次にこれらを踏まえて「生活文化」とは何か考えてみたい。

まず言えることは、人間の生きて活動する生活は、「もの」をぬぎにしては成り立たないということである。しかもものだけ、物質だけでは十分でない。人間の生活には、他の動物と違っておいしく食べ、美しく着、快く寝るというそれこそ文化の原点がある。つまり人間の生活はものに支えられているが、単にものそのものではない「もの文化」に支えられているのであ

る。

そこで「もの文化の上に成り立つ人間の生き方」を「生活文化」と言いたい。勿論この「生き方」には、精神的なものが強く働いている。

ところで先に、人間にとって「総べて生活ならざるはなし」と述べた。これは人間が生きていく上で関わる総べてが生活に関わるという意である。また「文化は生活する人間の『人知の積積』であり、社会生活の基盤である」と述べた。文化は生活する人間だけがもつことができるものである。従って「生活」と「文化」は、冒しがたく密接に結びついているといえる。そこで「生活文化」は人間が人間として生きていく上での根源といえる。人間は自己の生活文化を認識し、各人各様の、また各社会各様の生活文化を認め、人間のこの根源に触れることによって互に理解することができるのである。真に人々を結合するのは文化であると言われる由縁もここにある。

さてここで、「もの文化」についてもう少し考えてみよう。もの文化とは決してものだけ、物質だけではないのである。ものは確かに物質であるが、文化は人知、教養、精神的なものを含んでいる。ものを単にもので終わらせないのが、もの文化である。例えば、ここに一本の大木がある。これに祈りをこめて彫刻すれば仏像となる。ここに土がある。人はこれに水を加え成形し、火を加えてやきものを作る。それは使って役立つもの、住まいを飾るものかもしれないし、油滴天目茶碗のように無限の宇宙を内包して賞美されるものかもしれない。人はただ単に用が足りるだけでは満足しない。使って使い易く見て美しいものを求める。身を被うものは一枚の白布で十分かもしれないが、人は美しく快いように色や形をデザインし材料を選んで作る。このように「もの文化」とは、生活の便利さ、快適さ、人間らしさである。人間の生活にとって物質的・精神的に至便なもの、快いものを「もの文化」と言おう。

Ⅶ 結び——生活文化の方法

人間がものと精神によって、身体と心によって生きている生きものである故に「生活文化」は存在する。

そこで生活文化の方法を述べる前に、なぜ生活文化を学ぶのか、生活文化を研究する必要があるのか、考えてみたい。それは、自分が生きているこの現実社会の生活様式を知り、自分自身の視点を持つためと言えよう。今日は情報化、国際化、高齢化の三化^{さんぱけ}の時代といわれる。このような時代に、長い人生を自分を見失わず、しっかり自分自身のライフ・スタイルを持って生きてゆくには、まず自分の寄って立っている社会の文化の実体を知らなければならないと思う。現実的社会的信念を持ち、自分自身のアングル（視角）を持つためには、まずもって我々が生きている社会の文化を見極めることである。そして精神的エネルギーを蓄え、他文化と接

触することによって新たな創造を社会の文化に加えてゆくことである。

それでは「生活文化」を学ぶには、具体的にどうすればよいのだろうか。まず衣、食、住に関わる生活の中の「もの文化」について学ぶことである。そこで私はまず現在の社会で我々日本の民族が浴している文化——その最たるものと言われ、日本人の生活文化の根幹に触れる茶道をはじめ、華道、書道、マナー等々を、その造形面と精神面の両面から学ぶ必要があると思う。また衣、食、住の「もの文化」を造形（デザイン）を通して考え、我々の現在の生活様式を知ることである。そして将来新たに我々自身の生活様式を造り出してゆくことができればよいと思う。

そこで今後は順次可能な限り、我々の衣、食、住に関する文化、あるいは五感に関わる文化、そして何より我々の社会生活の根幹にあるいくつかの基本的流れである生活文化を一つ一つとり挙げ、その歴史、内容、現代における状況と意味などについて研究してゆきたいと思う。

参 考 文 献

- 「文化とは何か」 T・S・エリオット著、弘文堂、1948年
- 「文化の諸様式」 ルース・ベネディクト著、中央公論社、1951年
- 「日本の社会文化史4ー日本文化の変容」 平野健一郎ほか著、講談社、1973年
- 「明治文化史12ー生活」 渋沢敬三ほか著、原書房、1979年
- 「文化人類学入門」 祖父江孝男著、中公新書、1979年
- 「文化の心理学」 穂山貞登著、朝倉書店、1982年
- 「文化の手法」 吉田光邦著、思文閣出版、1982年
- 「文化の社会学」 加藤秀俊著、RHP研究所、1985年
- 「いまなぜ『文化』の時代か」 渡辺昇一ほか著、講談社、1985年
- 「文化とは」 レイモンド・ウィリアムズ著、晶文社、1985年